

人が時代を支配する

—19 世紀のカザフ詩人マハンベト・オテミスウルについて—

ジノリ＝ガブデン・ビセンガリ⁽¹⁾

坂井 弘 紀 訳・注・解説

～翻訳者から～

カザフスタンのカザフ民族大学文学部長のビセンガリ教授より寄稿された本小論は、19 世紀のカザフ草原西部、ボケイ・ハン国で起こった「イサタイとマハンベトの反乱」の首謀者のひとりである著名な詩人マハンベト・オテミスウル（ウテミソフ）について論じたものである（原文はカザフ語）。読者の理解を容易にするために、はじめにマハンベト・オテミスウルについて簡単に紹介しておきたい。

マハンベト・オテミスウル（1803/04-1846）

現在の西カザフスタン州生まれ。詩人、作曲家。イサタイ・タイマンウル^(*)とともに、ロシア植民地政策やボケイ・ハン国のジャンギル・ハンにたいする抵抗運動（1836-38 年）を指導する。イスラム式とロシア式の教育を受ける。父オテミスは有力なビーであった。1824-28 年にオレンブルグでボケイ・ハン国の第 3 代ジャンギル・ハンの息子ズルカルナイに仕えたが、34 年以降イサタイと帯同する。ジャンギルが領地を親族に分け与えたり、義父のカラウル・ゴジャに権力を与えたりしたため、イサタイやマハンベトとジャンギル、カラウル・ゴジャとの間の対立は深まった。それは、ロシアの政治介入や遊牧地の縮小といった土地問題を背景に大きな反乱へとつながった。

1838 年にイサタイが戦死すると、マハンベトはヒヴァで 2 年、兵士を集めることを画策したが、成果が出なかったため、ボケイ・ハン国にひそかに入り、身を潜めた。41 年、ついにマハンベトは捕らえられ、オレンブルグに送られた。オレンブルグの軍事法廷では、再び「動乱」にかかわらないことを条件に解放され、越境を禁じられた。45 年マハンベトは息子ヌルスultanを教育するためにオレンブルグに向かった。国境を越えたマハンベトを捕らえるための特別部隊が派遣され、コサック騎兵少尉によってマハンベトは殺害された。大衆の生活を描いた彼の詩は、農民反乱の真実の姿を伝えるとともに、民族解放の思想を示し、国の独立を呼びかけたと高く評価されている。

^(*)イサタイ・タイマンウル（1791-1838）は 1836-38 年にボケイ・ハン国で起こった民衆蜂起の実質的な指導者。

⁽¹⁾ アル・ファラビー名称カザフ民族大学カザフ文学学部長。同大学教授。文学博士。チンギス・アイトマトフ名称諸民族アカデミー会員、カザフスタン作家同盟会員。

* * * * *

時代の英雄マハンベト

そうだ。しかしいつもそうなのだろうか。

この世界には、自分が育った環境や生きている時代に逆らって、誰にも屈せず、激しい反論や急激な流れにむかって泳ぐ人はいないのだろうか。他人のことを考慮せずに、人は互いに反目しあう。一人の人間としての興味や欲望からではなく、たとえ謎めいた理想のような思想であっても従い、その命さえも捨てる覚悟がある。彼らの命さえも捧げた行動は、沈滞していた歴史を動かし、そこに新たな色を与え、毎日の平凡な生活から千人もの人を動かし、魂を奪い合い、あるいは与え合い、戦いに導き、眠っていた意識を呼び起こして動き始めるのだ。

彼らの中には、狡猾な人間に騙されてしまうものもいる。しかし、その多くは時代の先頭に立ち、すぐさま天賦の才を発揮する。彼らの希望は崇高なものであるが、その生涯は悲しみに満ちたものである。彼らの意図や望みはたとえ正当なものであったとしても、納得のいく結果が得られず、身近な人たちの人生に悲劇をもたらすということは歴史上多く見られる。「名誉は悲しみ(Қасиет-қасиет)」という言葉はまさにここにあるのだ！

動かぬ馬に鞍を置かず、磨かれた槍を手に持たず／
6つのマルタ⁽²⁾は食事にならず、お前から生まれた若い子供は
年老いて他人のようになった
馬上で太陽を見ることなく、飢餓の草原を見ることなく
餓えに苦しむ道を見ず、空腹で肉も食わず／
勇士の使命は終わったのか？

マハンベトはカザフ文学のカザフ史における位置を明確に世界的規模で語る事ができた偉大な詩人である。19世紀前半に植民者ロシアの侵攻を目にしたカザフの騎士が、秩序や服従、法律、横暴を不必要に受け入れ、しぶしぶながらも納得し、打ちひしがれていたとき、カザフ社会の意識とカザフ文学において、民衆の意思と英雄の精神をマハンベトほど詩に込めた詩人はいない。

⁽²⁾ 乳製品クルトのかす。(なお、以下脚注はすべて訳者による。)

マハンベトとジャンギル・ハン

人間性、誠実さ、真実について、むやみに疲れるまでさえずる人たちは、「ハン」自身のみならず、そのまわりの人々の前でもへつらうものだというところは誰もが知るところである。しかし、人生を詩に歌う技巧をマハンベトほど磨いた人はまれな存在である。

マハンベトには財産と興味にどっぷり浸かって生きる可能性や世界を揺らす能力さえもあつた。マハンベトが「はい、閣下」と謙れば、ジャンギル・ハン⁽³⁾は彼を上座に座らせただろう。しかし、マハンベトはそのように言うことはできなかった。

ジャンギルにたいして、マハンベトはこのように歌っている。

祖先の子、尊敬する勇士は、
敵を見ればそれを滅ぼすだろう
暴風が強まり打ち付ける。
悪人たちに視線をやれば、その家畜を愛するだろう。
駿馬の証の尻尾が炎を吹き上げる！
構うものか、民衆が立ち上がって、ハンが玉座で立てなくなろうとも！

あるいは、

12匹の雄犬と耳の短いハン、お前が欲するのは民である
お前が妬むのは私である。
ハンが息子の敵になること、平民が息子の長になること
それは、私のような勇士にとっては正しいことだ

あるいはまた、

ハンの子である白き骨⁽⁴⁾、古から互いに待ち伏せあつた
おまえこそ父祖の敵、おまえの宿敵はこの私

⁽³⁾ ジャンギル(1801-1845)はボケイ・ハンの息子。ロシアの傀儡ハンとして知られる。アストラハン総督府でロシア語による教育を受け、ヨーロッパの知識を得た。交易市や診療所・薬局の設置、「ジャンギル学校」と呼ばれる学校の開校などの功績もある。彼の死後、ブケイ・ハン国のハン位は廃止され、ロシアの行政化に入る。

⁽⁴⁾ 支配層の出自を意味する。対義語は一般大衆を意味する「黒い骨」。

こうして争いは始まり、それは血塗られた戦いにまで発展した。二人のこじれの原因は、彼らのあいだに生まれた小さな種子にあったのではなかった。問題は、進歩的な性格の二人と彼らの生きた時代にあったのだ。一人が時代を知れば、もう一人はそれに対抗した。かつてソビエト時代、ジャンギルは搾取者（資本家階級）、マハンベトは被搾取者（労働者階級代表）であると考えられた。彼らの間に殺し合いや撃ち合いのない闘争などはないものと考えられていた。だが実際は、マハンベトは貧困層の生まれではなかった⁵⁾。陽の当たらないような場所にいたのではなかったのだ。ソビエトの公式イデオロギーはこのことについて知っていたが、これを隠してきた。だが今日、隠されていた真実は明らかになり、そこから自由な思考がさまざまな形で現れている。

カザフの歴史において、その英雄的活躍が伝説に歌われた勇士たちは数多い。彼らの時代、ハンの勅令に逆らうことは、必ずしも死を意味するわけではなかった。それゆえ、ハンと詩人や語り手とが袂を分かつことは少なくなかった。しかし、マハンベトの時代の事情は異なる。彼の時代、ロシアの教育で育ち、「7つの言葉」を知り、それを理解することは、欲深き権力者であるジャンギルが行おうとした「新しいこと」につながるものであった。ジャンギル・ハンは時代の影響を受け、その流れを泳いだ。彼は教養・知識ある人物であった。時代の断崖を見て、その特質を理解した。ロシアに従う必要があり、ロシアとよい関係を持つほうがよいと、また文明化のために、ロシアの技術や知識を得て、文化的な定住生活に慣れる必要があると考え、自分なりのやり方でそれを実行した。カザフをロシアに近づけようと意図した。町を建設しよう、カザフ・ハン国の中心を作ろうと行動を起こしたのである。

ハン国の中心であるオルダを彼（ジャンギル）は置いた。

彼は宮殿を建てさせた、周りに何も無いところに、

遠い距離をさえぎって、（それを）見たものは打ち勝って進むことができず

進むことができないことはわかっていた

空から雪が絶え間なく降っても、暴風がハンに勝ることはありえない。

と、バイトク⁶⁾がどれほど讀んでも、彼自身が見たロシアの都市、すなわちアストラハンやサクト・ペテルブルグ、オレンブルグなどと比較したとき、自分の町がちっぽけなものであることをジャンギルはよく知っていた。勅令をどれほど出しても、その力が人々に及ば

⁵⁾ ソビエト時代、「（マハンベトの）父は貧しいカザフ遊牧民であった」とされた。История казахской литературы 2. Алма-ата. 1979. С. 62.

⁶⁾ バイトク・ジュラウは西カザフスタンの19世紀の語り手。ボケイ・ハン国でジャンギル・

ないことや自分には強力な軍隊が必要であるということを感じていた。

多くのカザフ人は、ジャンギル・ハンの作った町にそれほど関心を持たなかった。見たとしても、無関心であった。冷やかな様子であった。それを断固として拒絶したり、敬遠したりするほどではなくても、支持することもなかった。オルダでの生活にも民衆の視線は及ばなかった。ジャンギルが着手した教育事業を民衆はそれほど毛嫌いしたのではない。しかし、大都市の教育機関にカザフの子弟らがみな行けるわけではなかった。この教育を受けた僅かな者たちの中には、「故郷の悲しみ」を歌うものもいた。先進的な圧制の国に飲み込まれていったものも多い。カザフの社会意識の歴史にとって大きな意味を持つこの現象を、残念ながら、これまで研究者は注目してこなかった。

ジャンギルは見聞きしたことや学んだことを手本に変えることに力を入れた。だが民衆がこの新しさにどのように目をむけ、どのように受け入れたかという反応については聞きたいと思わなかった。マハンベトにとっては、ジャンギル・ハンのこの性格も気に入らなかった。気に入らなかったということはマハンベト自身が語る場所である。語り、またそれは書き記された。ハンに抗う罪びとは罰しなくてはならない。しかし不当な罰にマハンベトは従わなかった。ジャンギルがきつく苦しめた地はこのようなあり様であった。当初は、彼と理解のための道を探った。「ハンが屈むたびに詩人は自惚れる」。しかし、ついに双方は歩み寄らず、敵同士になってしまった。マハンベトは、ジャンギルが民衆に学ばせた教育や学校で形成された精神世界を知った。知って、それに抵抗した。さらに精神的奴隷の状態から人々を救うことを考えた。この状態は、人々にとってきわめて危険であると考えたのである。

多くのことを残したジャンギル・ハンがカザフの統治者の間でも特別な存在であったことはよく知られている。ヨーロッパの水準の知識をもった最初のカザフ人はジャンギル、その人である。しかし、希望と欺瞞とが結びついていなかっただろうか。彼の目の目的はボケイ・ハン国を、またそれを通じてすべてのカザフをロシアのようなヨーロッパ的文明化に導くことであった。カザフ人を土地に定住させ、彼らを定住民とすることにたいして、すぐに不協和音が生じた。それはついに武力衝突につながった。

ハンと民衆との間の亀裂は日ごとに深くなり、それは危険な渓谷に変わっていった。この対立の中、マハンベトは民衆の側に立った。自分の考えたことや見たことを滔々と語る勇士マハンベトは民衆の頭となり、自分の言葉で不快な日々と困難な時代を歌い、ジャンギルに伝えた。うわべを飾ることはなかった。はっきりと語った。すべてがそこから始まった。マ

ハンに仕えた。バイウルのアラシャ族の出身であるため、一般に「アラシャ・バイトク・ジュラウ」と呼ばれた。彼の詩はジャンギル・ハンに向けられ、彼の壮麗さを歌った讃歌である。

ハンベトの詩のテーマや思想の方向性は、直接衝突や蜂起に結びついた。彼の詩の芸術性や本質もここからうまれた。マハンベトは勇士の心を持つ人物である。すべてを知って、ロシア皇帝にもたれかかかかるジャンギル・ハンに立ち向かった。「ジャンギル・ハンと彼の後ろに立つ皇帝の権力に抵抗したビーやバトゥルの行動があった。この時期の運動は大衆を巻き込んだもので、その植民地抵抗運動は民族解放の歴史となった。(アウエゾフ⁽⁷⁾)」

カザフ文学史におけるマハンベト

マハンベトは、時代の要求を明確に理解していた知識人であった。伝統的な文学をよく知り、系譜による歴史にも精通していた。彼は、ロシアという国家とその政府の脅威を感じ、カザフのあり方に目を向けるべきであると考えた。ジャンギル・ハンの宮廷での儀礼的な生活とハン自身とは違う方向から何かを理解した。ハンの語った言葉を聴いた。ハンの考えとカザフのビー（裁判官・指導者）やシェシェン（雄弁家）、長老たちの言葉を、ハンの宮殿における華麗な生活と大衆の生活や人生を比較した。マハンベトは、民衆の静かな生活や伝統を壊していった横暴な力に賛同するよりも、ジャンギルと争うことが正しいと考えた。マハンベトは芸術と人生に向き合った。神から与えられた不屈さと勇敢さによって、ものごとを自由に明らかにし、それを歌に託し、その歌は民に広がった。マハンベトはこの戦いが容易ではないことを知り、戦友にこう歌った。

雄ラクダの血を引くラクダ、われらのこの仕事には黒いラクダが必要だ。
その肋骨を磨耗させ、一本一本引き裂いても、
眉をひそめ悲しむ勇士が必要だ。われらが志すこの仕事には。

マハンベトの詩が戦場での勇敢さや英雄的行為を称揚していることは、この蜂起に加わった人々にも伝わった。彼の詩には、ヴォルガ・ウラル流域における詩人や語り手の流派の伝統的なテーマも見出せる。勇敢な戦士の義務や本分、騎士の人生の意味は、「暖かい家に座りながら、安穏とした生活を送ること」ではなく、人々の義務である国の守りを知ること、またそのために「夜を徹して休まずに進み、顔色が変わる」ような生活を送ることである。知識人には、このようなテーマの潮流の始まりはよく知られていた。英雄叙事詩の揺籃地で、英雄叙事詩「クリムの40人の勇士」⁽⁸⁾の舞台でもあるヴォルガ・ウラル間の地域は、彼

⁽⁷⁾ ムフタル・アウエゾフ（1897-1961）カザフのもっとも著名な作家の一人で、社会活動家、文学研究者。

⁽⁸⁾ 中央ユーラシアのテュルク諸民族に伝わる英雄叙事詩の一群。ノガイ・オルダの実在した人物を中心に歴史的な出来事を描いている。

が生まれた地であり、カザフ、カルムイク、タタール、バシコルト（バシキール）、ロシアなどの民族間に起こった土地を巡る争いの中心となった場所であった。「食器に食べ物を盛りながら、隊列から見張りが見張った（食事を取りながらも敵を警戒するという意）」日々は、この地方にとっては日常的なことであった。イサタイの像を嘆き悲しみ描くに際し、マハンベトの作品ではこれらの英雄叙事詩の描写法や芸術的手法が調和していることがわかる。マハンベトは、マハンベト以前に活躍した語り手や詩人が語り継いだ、民衆のための勇敢な英雄行為を賞賛するテーマの伝統を高度な技能で発展させた。

しかし、伝統的な叙事詩とマハンベトの作品との間にある違いは明らかである。それまでの伝統的な語り手たちの作品における英雄を扱うテーマとマハンベトの作品における勇敢な精神性とを同一視することはできない。マハンベトはここで行軍や勇敢さを語るのではなく、特定の出来事、つまりジャンギル・ハンとの間で行われた闘争を語っている。それゆえ、彼の多くの作品には、「怠惰な馬には勇士は乗らぬ」という言葉が似合うような作品のロマンティズムや英雄の理念よりも重い思想が見られる。「クリムの40人の勇士」における勇士が古典的な叙事詩に共通する姿をしている一方、マハンベトの作品上のイサタイは民衆への愛に浸り、人々に敬愛される勇士の姿を具体的に示しているのである。

イサタイは「アクタバン馬」に乗った、乳を与え燕麦を与えて育てたのだ
大砲を三発撃っても（馬には）当たらなかった、神がこの獣をお守りになったからだ。

マハンベトは、それまでの語り手たちが用いた伝統形式を継承しながらも、個人性の特徴の叙述、流れる感情的内面、奏でられるメロディーとなる意味ある隠喩の手法をもちいた。それにより、彼は具体的な描写による芸術的な形を示した。マハンベトの描く理想的な英雄たちは、具体的な社会平等だけでなく、人間の独立性や自由さ、幸福な生活を守るための戦いにおいても勇敢さを示しうる不屈の人物たちである。

弓の弦をまだら牛の声のように唸らせた、射た矢はエディルとジャユク⁹⁾を横切った。
射た矢は雪のように砂埃を舞い上げた、あおい樹枝を血まみれの口でなめさせた。
ああ、イサタイは獅子であった。この空虚な世界で、彼を超える獅子は誰だ？！

マハンベトがイサタイの率いた蜂起のスポークスマンであったことは事実であるが、常に中

⁹⁾ ヴォルガ川とウラル川。

世の戦士のあり方を示すための詩人であった訳ではない。それゆえ、マハンベトが歌った、

強くなって弓も身につけず
次々と敵を逃がすこともない
勇士たちの仕事は終わるのだろうか？

という詩の意味を文字通りに理解することは正しくない。彼は、時代が変化している中、人々が平安な暮らしに安住するために不名誉を受け入れることに価値はなく、父祖伝来の高度な精神性を保つ必要があり、その義務によって団結する必要があるという考えをもっていた。この考えはマハンベトの多くの作品にさまざまな形で見られる。

マハンベトの詩では、ジャンギル・ハンとの争いが始まり、蜂起へと発展してから、次第に他のテーマが少なくなっていった。彼の作品と自身の人生はこの蜂起に向けられた。民衆が「国の精神」を保つことや勇士の闘争に向けられた。マハンベトは、作品に歌われる闘争と勇士のすべての主義・主張を終生行動に移した勇士である。彼の作品性について言及するとき、また彼の作品を分析するときに、このことを忘れてはならない。

マハンベトの人生は詩そのものであった。彼の詩は、精神的自由のために戦った内面世界や勇敢な行動、また敗北を喫して、孤独に過ごし、混乱に揺れる世界を示している。マハンベトは、他の民族の精神生活に基づいた生活習慣を模倣することを受け入れることができなかった。彼は、カザフが独自の生活を送ってきたことや環境と慣れ親しんだ慣習、習俗、生活様式が存在することを理解した。それゆえ外からやってきた他の民族の生活習慣がこの精神を変えてしまうことを望まなかった。彼の精神世界や心的世界はそれが蔓延することに反対した。

マハンベトの遺産

口頭伝承によると、マハンベトは10歳から詩作を始めた。しかし、それらすべてが知られているわけではない。その他の詩歌や叙事詩が残されていないことやその他のものが知られていないことには理由があるようだ。おそらく、作品そのものに階級闘争と政治性が求められた時代、マハンベトがジャンギル・ハンにむかって語った叙事詩を探し求めていたために、他の作品が集まらなかったからであろう。なお、1925年、タシュケントで出版された『イサタイとマハンベト』が彼の最初の選集である。

アバイ⁽¹⁰⁾までのカザフ詩の歴史で、マハンベトほど優れた詩人はいない。この事実をす

⁽¹⁰⁾アバイ・クナンバエフ(1845-1904)はカザフの著名な詩人。ペルシア・アラブ文学、ロシア文学にも精通し、その作品は多くの知識人に影響を与えた。

べてのカザフ人が首肯するであろうとカブドゥロフ⁽¹⁾が書き記しているように、マハンベトの作品がカザフ文学史に占める位置はきわめて大きい。

マハンベトはカザフの詩人の第一人者として、理想主義的な精神世界(英雄的側面)を表現するスタイルを確立した。彼は、自分の精神世界にある感性を繊細に震わす技能をもちいた。もちろん、マハンベトの作品には、語りの伝統に共通する特徴の繰り返しも見られる。しかし、カザフ文学の主人公の内的世界が、それまではなかったような心理学的視点で描かれるようになったのである。マハンベトは、経験し、見聞きした状況を描くとき、具体的な人間の姿に重点を置いた。彼の文には、感情を伝える多くの構成が見られる。感性が豊かで、心を十分に震えさせる。

広大な祖国、躡けられたヤギはいけにえに、
馬の背は平らで首は長く、矢を引く腕は長い
わが敵に立ち向かったとき、後に引かずに話す私は高貴である。

マハンベトはカザフの詩の芸術性を新しい段階に高めた。マハンベトの詩が生まれた日から、彼の作品はカザフ詩に影響を与え続け、その作品を模倣して書かれた叙事詩は数多い。その影響は、とくに大祖国戦争の時期に増大した。クルグズ、タタール、ウズベク、トルクメン、アゼルバイジャンなどの諸民族の戦争時代における詩にはマハンベトの影響が見られる。英雄性や勇敢な精神と愛国心を芸術的に歌うことにおいて、彼はモデルや手本となってきた。彼の詩は民衆の思想において、自尊心と勇敢さ、自由な性格を形付けるための計り知れない大きな役割を果たした。マハンベトはその大きな個性を、人権意識に燃える詩を通じて広めた。

マハンベトの詩には、語り手の伝統と彼の個性とが混ざり合い、それらが反映されている。生と死、昼と夜、自由と誇りなどといった永遠のテーマを歌うことに始まり、具体的な登場人物のそれぞれが抱える状況、感覚や気性へとつながっていく。詩の主人公がもつ事情をマハンベトはさまざまな手法で読者の前に示しているのである。

マハンベトは、その運命も作品も二度と現れることのない歴史上の支柱である。彼の文学と歴史における位置はこのように際立ったものなのである。

(アル・ファラビー名称カザフ民族大学教授)

Адамды заман билейді...

Зинопль-Габден Бисенгали

⁽¹⁾1927年現アトウラウ州生まれのカザフ人の作家、文学研究者。

* * * * *

訳者あとがき

2003年、カザフスタンではマハンベト生誕200年がユネスコの後援で記念され、関連行事が行われた。新聞や雑誌では彼の特集がいくつも生まれ、多くの作品集や関連書籍が出版された。盟友イサタイとともにロシアの傀儡であったジャンギル・ハンと戦い、カザフの自立を目指したマハンベトの行動が改めて高く評価されている背景は、ロシア・清朝の間でカザフの独立を維持したアブライやロシアに対する抵抗運動を行ったケネサルなどが、独立後のカザフスタンにおいて顕彰されているのと同様の文脈で理解することが可能であろう。

本論はマハンベトを高く賞賛しているが、それはひとつには、マハンベトがカザフ史上大きな意味を持つ反乱の一つである「イサタイとマハンベトの乱」の指導者として、カザフの自由と自立を希求していたこと、もうひとつは、戦いに加わった一個人の視点を作品に加えることで、カザフの叙事詩の流れに新しい特徴をもたらしたという二点においてである。とくに後者は、これまでさほど重視されなかった点であり、その指摘は意味深い。実際、カザフ文学の流れを、①『デデ・コルクトの書』で知られるコルクトからカザフの伝説的な詩人アサン・カイグまで、②アサン・カイグからマハンベトまで、③マハンベトからカザフ近代文学の偉人アバイ・クナンバエフまで、そしてアバイから現代までと4つに区分する意見もある。つまり、マハンベトはカザフ文学のターニング・ポイントとなった人物と位置づけられるのである。

なお、ジャンギルは功罪相半ばするものの、筆者が「カザフの統治者の中でも特別な存在で」、「ヨーロッパの水準の知識をもった最初のカザフ人」と書くように、カザフ近代史において重要な役割を果たした人物であることは確かである。近年ではジャンギルについて、ロシア皇帝に尽くし、彼にへつらった人物としてではなく、民衆を気にかけて、国のために尽力した誇るべき人物とみなすべきであるという意見もある。マハンベトやジャンギルなど、カザフの歴史上の人物の再評価と再認識は今後もなされていくだろう。

(和光大学表現学部)